

## 稲葉正就先生を偲んで

小川 一 乗



昭和47年11月22日、Sonam Topyag Kazi 夫妻が大谷大学を訪問された際に撮影

大谷大学名誉教授 稲葉正就先生は、ご病気のため不自由な身体となられ、数年来りハビリテーションに努められていましたが、病状が急に悪化して、平成2年7月8日ご逝去になられました。享年76歳。法名は西藏院釈正就。

先生は、真宗大谷派の浄教寺の長男として大正4年1月11日ご誕生、昭和12年3月大谷大学文学部を卒業された後、二度にわたる臨時招集を受けられましたが、その間に、大谷大学の仏教学研究室の副手、助手となられ、終戦後の公職追放が解除されて後、昭和28年1月大谷大学専任講師として復職されました。その後、昭和33年教授、36年授文学博士（博士論文「チベット仏教史に関する研究」）、55年3月定年退職、同年12月名誉教授。先生のご生涯は、大谷大学における研究と教育に捧げられましたが、しかし、それに専念されただけでなく、大学解体が叫ばれた混乱期の大学運営にも尽力され、大学院文学研究科長、文学部部長を歴任され、さらに、自坊にあっては住職として門信徒の教化に当たられるなど、多くの人々から敬愛されたご生涯でありました。

先生は、大谷大学において山口 益先生の指導の下でインド大乘仏教を勉強されましたが、山口先生の学問の特色である「仏教チベット学」を引き継いで、特に、チベット語仏教研究、チベット文法学、チベット仏教史、などに深い関心を持たれ、多くの業績を残されました。

それらの業績の中で、チベット語仏教研究としては、『円測解深密経疏の散逸部分の研究』（法蔵館、昭和24年）があります。チベット仏教における翻訳仏教文献の中には、サンスクリット原典からだけでなく、漢文文献からのチベット語訳が少なからず存在していますが、円測の『解深密経疏』のチベット語訳もその一つであります。そのチベット語訳に基づいて散逸している漢文文献を復元したのがこの研究であります。

チベット語文法学に関する研究としては、『古典西藏語文法要論』（法蔵館、昭和24年）、（共著）『形態論より見たるチベット語文法』（法蔵館、昭和28年）、『チベット語古典文法学』（法蔵館、昭和29年）等があります。これらのチベット文法学に関する業績は、学界から高く評価され、特に、『チベット語古典文法学』は「仏教チ

ベット学」にとって不可欠なチベット語文法のテキストとして多くの大学で使用されました。

多数の論文（約40点、但し研究発表要旨は除く）の中で最も多いのがチベット仏教史に関する論文であります。著書としては（共訳）『フランテプテル チベット年代記』（法蔵館、昭和39年）があります。稲葉先生が仏教を中心とするチベットの歴史研究に携わっておられた当時の日本におけるチベット史学は、大変な努力の積み重ねにもかかわらず、その歩みは遅々たるものであったといえましょう。現在の学的レベルに比べて隔世の感がありますが、それは、政変により昭和34年にダライ・ラマ十四世がチベットからインドに亡命したため、彼と行動を共にした多くのチベットの学僧たちが、その後インドから世界各国に流出したことによって凶らずも齎されたチベット学の進展であったといえます。

以上、簡単に取り上げてみましたこれらの先生の業績が生み出されたことについては、昭和33年に渡欧され、特に、イタリアに約半年間滞在され、東洋学研究所の碩学 G. Tucci と親しく学的交流をもたれたことも忘れてはならないでしょう。

既に周知されているように、大谷大学の図書館には西藏語文献が多数所蔵されています。特に、『北京版西藏大蔵経』は有名であり、山口 益先生のご努力によりその影印版が出版され学界に大きく貢献して今日に至っていることについて今更申すまでもありません。この影印版の「総目録・索引」が昭和36年に出版され、さらに、この『北京版西藏大蔵経』の目録を異版との勘同を踏まえた上で出版するための、「西藏大蔵経勘同目録編纂所」が山口先生が所長となられて大谷大学に設置され、その第一分冊が昭和40年に『大谷大学図書館 西藏大蔵経丹殊爾勘同目録Ⅰ—1』（鈴木学術財団）として出版されました。これらの出版に当たっての実際上の仕事をされたのが、稲葉先生を初めとする、佐々木教悟先生、故荷葉堅正先生、その他の方々でありました。その後、『勘同目録』の事業は継続され現在までに七分冊が出版され、残すところ三分冊程となりました。この事業も、山口先生の熱意とその熱意に動かされた稲葉先生を初めとする先生方がおられたからであります。

その他、大谷大学図書館には「蔵外文献」といわれるチベット語文献が沢山所蔵されています。それらは整理の結果約4000点余りにも及ぶことが明らかとなりました

が、その整理に強い熱意を持たれたのが稲葉先生でした。稲葉先生は山口先生が退職された後、その後を受けて昭和44年に「編纂所」の所長となられ、昭和55年に大谷大学を定年退職されるまで、『勘同目録』の出版を継続される傍ら、「蔵外文献」の整理にあたられました。その成果は、『大谷大学図書館 西藏文献目録』（大谷大学図書館、昭和48年）として出版されました。しかし、その中に含まれている文献は多岐にわたり、内容不明の文献もあるため、それらの内容を更に明確にする必要に迫られました。時あたかも、昭和49年にツルティム・ケサン（昭和59年に日本国籍を持ち、日本名は白館戒雲、昭和60年より大谷大学専任講師）氏が国際仏教徒協会の招きによって来日されるや、稲葉先生は博学な氏の協力によって文献の再整理とその内容確認が推進されることを願われました。ツルティム・ケサン氏は先生の要請を快諾され、その願いは実現しました。

稲葉先生の意志は受け継がれ、昭和60年に『西藏文献目録 索引』が出版されました。この索引は、書名、略書名、著者名の索引と、内容項目別索引とから成り、ツルティム・ケサン氏の協力がなければ到底成し遂げられなかったといえましょう。さらには、「蔵外文献」の中から稀観本の影印出版を『大谷大学所蔵西藏蔵外文献叢書』として昭和63年に開始し、現在までに四冊が出版されています。

尚、これら『勘同目録』などの出版は、現在では大谷大学真宗総合研究所の中の「西藏文献研究班」によって継続されています。

このように、チベット語文献を基本とした稲葉先生のご研究からも明らかのように、先生は、日本西藏学会の発展にも貢献されました。昭和28年に関西大学において学会が発足して以来、発会に当たって尽力された山口先生（当時は大谷大学長）の手足となって学会のために貢献されました。山口先生が学会の顧問となられた後は、大谷大学を代表する学会の委員となられ、学会の発展のために寄与され、大谷大学を定年退職された後は、学会の顧問となられ、ご尽力くださいました。

いまはまだ、温厚で飄然とした先生の在りし日を忍びつつ、哀悼の意と共に心からのお礼を申し上げる次第です。

（大谷大学教授）